特集

退職者は語る

－広大を去るにあたって思い出をつづる－

退職者に送る言葉

一日をよく生きること

広島大学長　原田康夫

このたび、本学より五十九名の方が退職されます。

本年退職される皆さんは、ほぼ私と同時代の人たちばかりで、教官の皆さんは私と同年であります。従って、子供のときから成人まですべて同じ社会環境にあったわけです。

学校は、尋常小学校から国民学校になり、戦争に突入、敗戦、中学校から高等学校、大学は新制、とすべて教育制度の転換期を経験してきています。これが良かったか悪かったかはいまだによく分かりませんが、お互いに、今日まで無事過ごしてこられたことを感謝しなければなりません。

ただ、昭和一桁世代は物のない時代に育っただけに、食べるものにいじきたなく、成人病になって早死する集団、とよく言われてきました。特に、糖尿病、高血圧、心疾患、ガン、いずれも検診では高率に危険因子が見出される年代であります。でも、今日まで生き延びた皆さんは、それぞれに一番危険な五十代を乗り切ってきた人ばかりです。自分なりの健康法を持っておられるに違いありません。

今、日本人の寿命は世界一を誇っています。定年まで元気に生きた人は、六十代は十分元気で過ごせる予測がつくものです。問題は、あと残された人生をどう生きるかです。

私は、五十五歳の時から自分の老年期への対応を考え、毎日、ラジオ英会話に朝一時間、次いで四十分のゴルフの練習（百五十球を打つ）、それからシャワーを浴びて食事、九時に出勤する。夜の会合は一次会のみ、二次会はつきあわないこと、午後十時から一時間はヴァイオリン演奏と、朝六時から夜十一時まで規則正しい生活を続けて丸八年が過ぎました。

生きることは、目標を持って日々精進し、毎日を満足感のある生活をすることではないかと思います。いたずらに長く生きることよりも、毎日をよく生きることが大切だと思います。また、年を取ると子供たちも独立し、周囲には少しずつ友人も欠けてくるものです。人に頼らず自分で楽しく生きる方法を探すことと、一番多く一緒にいる伴侶を大切にすることのように思います。

どうか、健康で今までより以上に充実した人生を送ってくださることを心からお祈りして、お祝いの言葉といたします。

長い間、ご苦労様でした。

平成六年度退職者（教官・事務・技術系）

◎教官

大学教育研究センター　関　正夫
総合科学部　藤本黎時　小林惇
文学部　湯浅信之　藤原健蔵
坂本公延　好村冨士彦
吉川守
教育学部　松村幹男　斎藤稔
井口博之　藤谷健
学校教育学部　櫻井照男　黒田耕誠
田口則良
理学部　西岡みどり　林通郎
山岡究　米澤穣
医学部　入内島十郎　魚住徹
田坂博信
医学部附属病院　福地坦
歯学部　岡本莫和　田卓郎
工学部　葉佐井博巳　長瀬洋一
新見治　吉田典可
吉國洋　小倉文夫
永井史郎　吉村尚眞
生物生産学部　岡田育穂
原爆放射能医学研究所　藏本淳
附属福山高等学校　新良貴健三
附属福山中学校　藤重敦臣
附属東雲中学校　古谷芳太郎